

H28海外臨床実習

国・地域	ミャンマー
------	-------

番号	報告者	渡航先機関での 受入期間	受入機関
1	K. M	H29/2/5-H29/2/12	国立ヤンキン子供病院

## 平成 28 年度岸本国際交流奨学金による海外活動実施報告書

医学部医学科 5 年  
K. M

私は、2月5日から2月11日の期間、市川肇先生（国立循環器病センター）率いる、「あけみちゃん基金」の医療団と共に、ミャンマーのヤンキンこども病院に訪問した。期間中は以下の通り、医療団が現地で行う、先天性心疾患の患児に対する手術を見学させていただいた。

今回のような貴重な機会をいただいた岸本忠三先生に心から感謝してやまない。

### ■今回の活動目的

途上国の一つであるミャンマーの実際の医療の状況を見て、日本の医療との違いを学ぶ。また、これから国際的医療人として活動する中で、何が必要とされているのかを感じ、それを現地のドクターと議論しつつ、自分がどのように今後の学びを進めていくべきかを考える。また、ミャンマーの先天性心臓疾患の疫学的状況を学び、日本との違いがあれば、それはなぜ起きるのかを考える。また、ミャンマーの心臓手術をするドクターが少ないとのことであるが、心臓疾患を患っている患者のために、今自分が何をできるかを考える。

### ■渡航期間スケジュール

- 2月5日 現地到着後、症例検討カンファに参加し、手術方式・手術日程などを決定。  
その後、現地のスタッフと懇親会
- 2月6日 午前 手術見学  
午後 現地で難民のために社会的起業をしている新谷夢氏と面会
- 2月7日～10日 手術見学
- 2月11日 術後管理のためICU訪問後、帰路につく。

### ■活動成果、今後の抱負

明美ちゃん基金とは、1966年に産経新聞に掲載された記事をきっかけにして誕生した、先天性心臓病などに苦しみながら経済的な事情で手術を受けることができない子供たちを救うための基金である。活動資金はすべて産経新聞読者を中心とする一般の人たちからの寄託金でまかなわれ、40年以上にわたり、100人を超える幼い命を救ってきた。今回の渡航は、その一環であり、ミャンマーの先天性心疾患の子供を救うために外科医・麻酔科医・内科医・臨床工学技士・看護師で構成された約15名の医療団が5年間にわたって年に2,3回ミャンマーを訪問するというプロジェクトである。今回はそのプロジェクトのちょうど真ん中に当たる、2年目であり、今回は初めて10歳以下の子供を対象にした治療を

行い、1週間にわたって外科チームとしては7例の症例の治療を行った。また、今回は初めて、患者のケアなどを指導することを目的に、看護師もメンバーに加わった。今回、岸本先生のご援助を賜ったため、私も学生として初めてこのプロジェクトに同行させていただくことができた。

まだまだ初学者であり、完全なる足手まといでありながら、同行させていただき、先生方の手術を見学させていただいた上に、その見学を私見で報告させていただくのは大変恐縮であるが、報告させていただこうと思う。

まず、現地の症例の重症さに驚いた。現地には、妊婦検診や乳幼児健診がないため、患者が先天性心疾患をもっているということが発覚するのがとても遅い時期であることが多い。今回見た症例でも、重症になるまで医療機関にかかることがなかったために、SpO<sub>2</sub>が40%というとてもシビアな状況でオペを迎えることになった例があったり、身体への酸素供給不足を補うため、多血症化し、ヘマトクリットが70ほどある例もあったりした。ミャンマーのような途上国では、まず患者が苦痛を訴えてからも、それがどのような要因で起きているのかを特定するまでに時間がかかり、さらにその治療を行うための資金もない状況であるため、このように重症化してやっと治療というステージにたどり着けるのであろう。今回のプロジェクトは、明美ちゃん基金としてのファンドを利用し、患者を無償で治療を行ったとのことで、患者たちにとっては大きな救いの手となった。しかし、このような地では、病状が悪化した際に再手術が金銭的にも、現地の術者の腕前的にも、不可能であるという状況を考えると、「患者にとって、ここで手術を施行されることは果たして本当に幸せなのだろうか」という問いを抱かずにはおれなかった。

また、現地の医療の技術が思っていたよりも低く、ICUの管理等で日本と比べて劣っているところが見られた。今回のプロジェクトでは、日本のスタッフが指導も行い、手術手技について、ICU管理について、人工心肺についてなど、たくさんの方を指導しているところを拝見した。どれをとっても、現地の医療スタッフにとってはとても学びになっているようだった。

今回の実習は、student doctor 資格取得後初の海外実習で、これまでたびたび行ってきた途上国でのスタディツアーとは違った視点から医療支援を見ることができた。これから自分は1医師として国内外で活躍していく予定だが、途上国においても、先進国においても、どこでも普遍的な健康をもたらせるような社会にできるよう、どうしていくべきかという点をこれからも考え続けたいと感じた。